ひと まち

川越と舟運

およそ三百年間にわたり、川越と江戸とを結ぶ重要な輸送路として隆盛を極めた新河岸川の舟運。

荷が運ばれた江戸の経済繁栄の中心地「日本橋」は、今年、現在の石橋になって百周年を迎えました。10月30日に行われた架橋百周年のイベントには、舟運で縁のあった〝小江戸〟のまちが、お祝いに駆けつけました。

新河岸川の舟運は、寛永十五年（一六三八）の川越大火で焼失した仙波東照宮を再建するため、建築資材を舟で輸送したことに始まるとされています。江戸時代、川越周辺の河岸場は、扇河岸、上・下新河岸、牛子河岸、寺尾河岸の五つで、これらは「川越五河岸」と呼ばれました。また、江戸中期に古市場河岸、明治初期に仙波河岸が開設され、明治中期まで川越の舟運は繁栄しました。

船の種類や所有者などが記された「五河岸船鑑札控之帳」によると、安政六年（一八五九）のころ、川越の河岸には、八十艘近い舟が出入りしていたという記録が残っています。当時の新河岸川は、多くの舟でにぎわっていたことが分かります。

舟運は、馬や籠を使う陸上交通よりもたくさんの荷物を運べるうえに運搬経費が安いため、次第に盛んになりました。また、甲州や信州から陸路で川越に集まった、たくさんの荷が江戸に向け運ばれました。

江戸に運ばれた下り荷の中心は、米や麦などの農作物や石灰、炭、木材でした。中でも川越特産のいもやそうめんなどは江戸で人気があったようです。江戸から運ばれた上り荷は、織物や塩、酒、小間物などの日用雑貨品が主なものでした。また、舟運はものだけではなく、江戸の文化をいち早く川越に伝えました。

明治時代以降、鉄道の開通により輸送手段は舟運から鉄道へ徐々に移行しました。また、洪水対策による河川改修によって、舟の運航に支障が出るようになり、舟運は衰退していきます。

しかし、舟運によってもたらされた江戸の文化は、小江戸川越の今に息づいています。

旭橋のたもとに建つ記念碑には、舟運の様子を伝える「新河岸川舟歌」の一部が刻まれています。

舟運で使われた「川越ひらた」の模型（市立博物館展示品）。浅い水深で動くことができる平らな底が特徴。

河岸問屋の面影を残す「伊勢安」（下新河岸）

「五河岸船鑑札控之帳」（市立博物館常設展示図録より抜粋）

明治の初めに設置された仙波河岸の跡に作られた仙波河岸史跡公園。自然が多く残る同園は、子どもたちの遊び場や、散歩コースとして使われています。

明治時代の旭橋周辺の河岸場を復元した模型（市立博物館展示品）。当時の河岸場の様子を知ることができます。

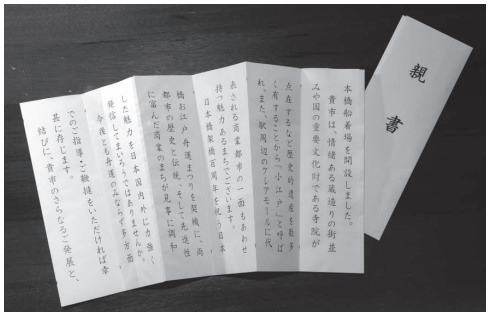
日本橋架橋100周年まつり

10月23日、江戸時代の舟運を再現した「新河岸川舟行列」の4艘の舟は、川合善明川越市長らを乗せ、下新河岸を出発。途中、福岡河岸（ふじみ野市）、伊佐島河岸（富士見市）、宗岡河岸（志木市）に立ち寄り、ふじみ野市・富士見市・志木市・朝霞市・和光市の5市長から中央区長あての親書を預かりました。

10月30日に行われた「日本橋 お江戸舟運まつり」には、川越市のほか、「小江戸サミット」で連携している栃木市、香取市からの舟も日本橋に集まりました。式典では、川合市長から矢田美英中央区長に親書が手渡されました。当日は、鎧姿の川越藩火縄銃鉄砲隊保存会による鉄砲演武や素戔嗚尊の山車（西小仙波町）に乗る竹生会の囃子が披露され、会場を大いに沸かせました。

日本橋をパレードする川合市長と川越藩火縄銃鉄砲隊保存会

10月23日に新河岸川を下る舟行列の様子。御用舟を先頭に、川越藩火縄銃鉄砲隊舟、お囃子舟、荷舟が続きます（九十川樋門の下流付近）。



中央区長からの親書には、「日本橋架橋百周年を祝う日本橋お江戸舟運まつりを契機に、両都市の歴史と伝統、そして先進性に富んだ商業のまちが見事に調和した魅力を日本国内外に力強く発信してまいろうではありませんか。」と記されています。

日本橋に鳴り響く川越藩火縄銃鉄砲隊保存会による鉄砲演武の音。日本橋で火縄銃が放たれたのは、初めてかも知れません。